

## テ形接続の意味と用法

渡邊 文生

### 1. はじめに

本研究は、テ形接続の意味解釈を考察の対象とする。テ形接続文の意味は、テ形によって接続される前件と後件の命題内容、及びその意味関係への依存度が高く、用法が多岐に渡っている。そのため、テ形自体に意味はあるのかということがしばしば問題になる。つまり、テ形そのものには意味がない(cf.遠藤裕子1982:51)という見方や、テ形には動詞と動詞、あるいは節と節を結びつける純粋な文法的機能しかない(cf.草薙裕1985:22)という見方が出てくる。そこで問題となる「意味」とは何かということには議論の余地があるが、本研究では、テ形自体が表す基本的な意味構造を探っていくことにする。

接続助詞〔注1〕としてのテ形には、その文法範疇が持つ機能として、節と節とを結び付け、関係付ける働きがある。もしテ形に何らかの意味があるとするならば、関係付けられたふたつの節の間に一定の意味的な方向付けがあると見なすことになる。そこで従来の記述的研究において提案されたテ形接続の用法分類や説明を検討しながら、テ形の基本的な意味について考察していこう。なお本研究では、テ形が動詞と結び付いている場合を議論の対象とし、状態性の述語(形容詞・名詞+だ)の場合は除外した。また、「～について・～に反して・～に関して」などの表現〔注2〕や「～ている・～である・～てくる」などの表現〔注3〕は、形式的に定形の表現となっているため、これらも考察の対象から除外されている。

### 2. テ形の用法分類

テ形接続には、どのような用法が提案されているか概観する。テ形の用法分類を試みている記述的研究としては、国立国語研究所(以下、国研)1951、森田良行1980、遠藤裕

子1982などがあげられるが、ここでは森田1980の分類を見ることにしよう。

森田1980は、接続助詞「テ」を「ある叙述から次の叙述へと移るときの橋渡しとして用いる繋ぎの語(p.313)」と規定し、各用法の意味は前件・後件の内容によって分かれるとしている。分類された用法は、次の8つである。

- ①並列 今日(私は)銀行へ行って、郵便局へ行って、デパートへも行こう
- ②対比 おじさんが山へ行って、おばあさんが川へ行ったのです
- ③同時進行 あの運ちゃん(は)、わき見をして運転している
- ④順序 学校へ行って、先生に会った
- ⑤原因・理由 花瓶が棚から落ちて割れた
- ⑥手段・方法 バスに乗って帰ります
- ⑦逆接 彼はそのことを知っていて言わない
- ⑧結果 彼が参加して五人になる

この分類は、何らかの規準を設けて用法を分けたもの、というよりはむしろ、テ形接続の文に認め得る前件と後件との意味的関係のリストといえる。そのため、あるテ形接続の文とこれらの用法のうちのどれかが、一対一対応的に当てはまるととらえるべきものではない。たとえば、⑤原因・理由の例文では「落ちる」ことと「割れる」ことには継起性が認められるため、④順序の用例とも見ることができる。

森田1980の主張において特徴的な点は、前件と後件の前後関係が、時間的前後関係とは必ずしも一致しない、という立場をとる点である。たとえば、①並列の例文において「銀行へ行くこと」と「郵便局へ行くこと」と「デパートへ行くこと」は、必ずしもこの順番で行われるということを含意せず、この点が④順序の用法との相違点となる。

前件・後件の前後関係と、それらが表す事態の時間的前後関係はそれぞれ独立した関係であると考えるならば、④順序という用法において、2つの事態に認められる継起的な関係は、前件の事態が後件の事態の生じる前提になっているという意味的な関係から、導かれたものということになってしまう。しかし、④順序という用法は、⑤原因・理由の用法に比べ、因果などの意味的関係が強調されないものとして設定されている。そうすると、④順序が表す継起性とはどこからもたらされたものなのか。このことは、前件と後件との時間的な配置関係と、原因や手段など何らかの言語外的な推論に基づく意味

関係とを、同一平面上で考えずに、それぞれ独立したものとしてとらえていくことの必要性を示唆している。

### 3. 規則化の試み

前節で取り上げたのは、テ形接続の用法を包括的に記述し分類しようという試みであった。それに対しこの節では、規則または原理を立ててテ形接続の現象に説明を与えようとする研究を概観する。

#### 3. 1. 久野1973の研究

まず、久野1973の主張は次のようにまとめることができる。

「 $V_1$ シテ $V_2$ 」という構文において

①  $V_1$ 、 $V_2$ の主語が同一の場合

- a  $V_1$ の動作が完了してから、 $V_2$ の動作が行われる。
- b  $V_1$ と $V_2$ の二つの動作が同時に起きる場合、「シテ」形接続は用いられない。
- c  $V_1$ 、 $V_2$ 共に、同じタイプの動詞でなければいけない。

②  $V_1$ 、 $V_2$ の主語が異なる場合

- a 「シテ」に完了の意味が含まれなくなる。
- b 問題になっている動作・出来事のスコープがはっきりしていなければならぬ。

久野1973は、動詞の連用形による接続との対立においてテ形接続をとらえている。上のまとめのうち、① a は(1)の2つの文の対立に基づいている。

- (1) a. 太郎は上着を脱ぎ、ハンガーにかけた。
- b. 太郎は上着を脱いで、ハンガーにかけた。

つまり、テ形接続の(1 b)では「脱ぐ」という動作が完了してから、「ハンガーにかけ」という動作が、非言語的コンテキスト(上着は、脱いだ後でないとハンガーにかけら

れないという事実)からではなく、構文的に、はっきり表されている。しかし、連用形接続の(1 a)ではそうではなく、たとえ(1 b)のような完了の意味が認められるとしてもそれは非言語的コンテキストによるものだ、と説明している。また① b は、① a の帰結として導かれ、(2)の文の対立によって例示される。

(2) a . 太郎は中国語も解り、日本語も解る。

b . \*太郎は中国語も解って、日本語も解る。

① c において、「同じタイプの動詞でなければいけない」というのは、「 $V_1$ 、 $V_2$ 共に、意志でコントロールできる動作・状態を表すか、 $V_1$ 、 $V_2$ 共に、意志でコントロールできない動作・状態を表していなければならない」という制約を意味している。つまり、(3)において(3 a)は「起きる」「顔を洗う」ともに意志でコントロールできる動作であるから問題ない文であるのに対し、(3 b)の「目を覚ます」は意志でコントロールできない動作であるため非文法的となる。

(3) a . 太郎は朝起きて、顔を洗った。

b . ?太郎は朝目を覚まして、顔を洗った。

$V_1$ 、 $V_2$ の主語が異なる場合の② b の制約は、前件と後件の間に共通性または意味的なつながりがなくてはいけない、ということである。久野1973は、次のような文をあげて、(4 a)においては議論される動作のスコープが限定されているのに、(4 b)では動作のスコープが十分限定されていないために不自然な文になる、と説明している。(4 b)が自然な文となるためには、「誰か複数の人物が、それぞれ花子と秋子をなぐった」ということが、文脈から明らかにならなくてはならなくなる。

(4) a . 太郎がピアノをひいて、花子が歌を歌った。

b . ?太郎が花子をなぐって、二郎が秋子をなぐった。

ここまでのまとめからも理解できる通り、久野1973が提出している原理・制約は、文の解釈のプロセスについてのものではなく、文生成のプロセスに関わるものといえるだ

ろう。また(1)の説明からは、テ形接続の文の意味が、前件と後件の意味的關係のみによって決まるのではなく、テ形接続という構文自体に意味がある(久野1973はそれを完了と名付けている)と認めている、ということが分かる。しかし、前件と後件の主語が同じ場合、すべてにおいて「完了」、すなわち前件の事象が終了した後に後件の事象が始まる、という関係があると主張することは、「歩いて行く」のような例を説明できなくなるという点で、強すぎる主張と言わざるを得ない。

### 3. 2. 大鹿1986の研究

次に大鹿薫久1986を取り上げる。大鹿1986の主張は、おおよそ次のようにまとめられる。

#### ③主語が同一の場合

a 動詞性がない→修飾句

b 動詞性がある→前件と後件との関係は並列関係

同一主語であるため結果的に先行-後行関係

他動性の動詞→方法-目的

自動性の動詞→原因-結果

\* しかしこれらは述語のあり方によって出てくる関係の意味であって、「て」が表しているのは「先行-後行関係」のみである。

#### ④主語が異なる場合

→並列関係

③aの「動詞性がない」とは、前件の動詞の時間性とボイス性が失われている場合を指す。(5)がその例文である。大鹿1986は、これらの文が山田孝雄1936の有属文に相当すると述べている。この有属文中における附属句(ここでは、テ形接続文の前件に当たる)は、「一の句が独立性を奪はれ他の文中に於いて一の語と同じやうに用ゐられて、ある位格に立つ(山田1936:1089)」ために、後件の修飾句としての役割を果たすことになる。

(5)a. 老婆は疎らな歯を出して笑った。

b. みんな犬をとりまいて輪になって見物した。

前件の動詞に「動詞性」がある場合、根本的には前件と後件とに並列関係があるとするが、2つの動作主体が同じなら「その動作を述語として並列するというこの種の文は一般に必ず『先行-後行』関係をもつ(大鹿1986:225)」と述べている。さらに動詞が他動性の場合と自動性の場合とに下位区分される。「他動性・自動性」という概念ははっきりとは定義されていないが、自動性動詞が「無意志的・結果的性質」を持つとしていくところから、久野1973の「意志でコントロールできる動作・できない動作」という対立と類似した概念かと思われる。

(6) a. 山椒魚は岩屋の出入口に顔をくっつけて岩屋の外を眺めることを好んでいたのである。

b. 巧妙な仕掛で郭大した曲線を調和分析にかけて組成因子間の関係を調べたりして、

(7) a. 病人はみんな腹わたが焼けて死ぬのだ、と言った。

b. 腫物は西洋の薬できれいに洗われてじきによくなった。

(6)の文は他動性の動詞の例で、前件と後件とに「方法-目的」という意味関係が表され、(7)の文の方は自動性の動詞の例で、前件と後件の間に「原因-結果」の関係が表される。しかしこれらの意味は、「他動性・自動性」という動詞のあり方に起因したもので、テ形によって表されるのは「先行-後行」の関係のみだ、としている。ここからテ形接続の構文自体に内在する意味関係を認めていることが分かる。

前件と後件の主語が異なる場合は、並列関係のみが表され、これがテ形接続の最も純粋なものとして位置付けている。また久野1973の②bの制約と同様に、前件と後件の対立を許すような大きな主題が必要とされる。すなわち、(8)において後半の文の前件と後件は共に「甕」という同一の主題について叙述している。

(8) 浩が最初に目にとめたのは厚い石材の上に置いてある甕だった。水が張ってあって、睡蓮が咲いていた。

### 3. 3. 共通点と相違点

久野1973と大鹿1986の主張にはいくつか類似点が指摘された。その他の共通点として

は、両者ともテ形接続の構文自体に備わっている意味を認めている点があげられる。

しかし両者にはかなりの相違点がある。まず久野1973の枠組みが文生成のプロセスに関わるのに対し、大鹿1986の枠組みは文の解釈のプロセスに関わるものと言えるだろう。また「先行-後行」という概念は、「完了」のような前件の事象が終了してから後件の事象へと移行する、というほど強い限定は含まない。つまり、(6b)において「調和分析にかける」という動作は、「調べる」という動作に先行するとしても、これら2つの動作が時間的に重複することがありうる、ということである。

#### 4. 修飾句的用法の時間性

大鹿1986の主張の特徴は、前件・後件の主語が同一の場合、テ形に動詞性のあるものとならないものを区別している点である。動詞性を失って修飾句となるテ形は、成田徹男1983が議論しているテ形の「副詞的用法」に相当するものと考えられるが、これは、従属節である前件の後件に対する従属度の問題としてとらえられる。従属度に関しては、南不二男1974がAからDまで4段階の従属度のレベルを設け、そのうちテ形接続はA～Cの3段階にわたって用法が位置付けられるとしている。また草薙裕1985は、南1974の段階分けをもとに、テ形接続に関する考察を進めている。しかし、そこでは「手をつないで歩く・髪をふりみだしてとびかかる・椅子にかけて食事をする」のように最も従属度の低いA段階のテ形も、それらは「継続」と呼ばれ、時間的關係としてとらえられている。大鹿1986においては、動詞性がないということは時間性、ボイス性がないということであるから、最も従属度の低いテ形接続に対し、時間性を認めるかどうかという点に意見の対立が生じる。

Dhorne1981も、テ形接続に時間性を持たない場合があるという観察をしている。つまり(9)の対話において、「車で」に時間性がないのと同様に「歩いて」も全く時間性がない、と言う。(cf. Dhorne1981:22)

- (9) a. 車で回ったらしいけど …  
b. 車でではなくて、歩いて回った。

確かに「車で」と「歩いて」にはパラダイグマティックな関係を認めることができる。しかし、これだけで「歩いて」に時間性がないと結論できるだろうか。動詞と名詞とを対照させようとするならば、「歩いて回る」と「歩行で(によって)回る」や「車に乗って帰る」と「乗車で帰る」などの対立を考えてみる必要がある。明らかに後者の文は許容できない文であるが、それは「歩行・乗車」という名詞には「歩く・車に乗る」の持つコト的な性質〔注4〕が完全に失われているからである。逆に言えば、「歩いて・車に乗って」は、たとえ従属節としての独立性が低く、修飾句として主節に取り込まれるとしても、コトとしての性質を維持するのであり、その意味において時間性を持つと言えるのではないだろうか。

## 5. テ形の基本的意味

### 5. 1. 問題点の整理

前節までの議論から、テ形接続の用法を考える上で、テ形自体が持っている構文的意味と、前件・後件の内容的な関係とを、分けてとらえることの必要性が指摘される。たとえば、前件と後件の間に生じる「方法－目的」という関係に関して、「ハズミをつけてまわす」のようにその関係が強く感じられる場合と、「ラジオを聞いて勉強する」のように、「方法－目的」の関係を持つ読みと持たない読みのあいまい性がある場合とがあるが、それは「方法－目的」という関係の軸における位置付けの問題であって、テ形自体が持っている意味は、「ハズミをつけてまわす」の場合でも「ラジオを聞いて勉強する」の場合でも、同様に保たれていると考えるべきである。

「修飾句的なテ形接続」の用法に関して、ここでは前件の従属度に関わらず時間的な関係の軸が問題になり得る、という立場をとる。結局テ形接続においては、前件・後件という2つの事象の関係付けが問題であり、テ形の働きが主節である後件の事象について語る際の、視点の置き場所を設定することとするならば、それらが関与する次元は時間的な軸、ということになろう。

### 5. 2. 目標点の有無による動詞の分類

テ形接続自体の意味を考える前に、「テリック／アテリック (telic/atelic)」という



動詞のアスペク的な対立を取り上げる。これは、Garey1957がフランス語の動詞を分類するのに用いた概念だが、動詞が表す事象にゴール、すなわち目標点があるかどうかということが規準になっている。目標点がある場合がテリックの動詞、目標点がない場合はアテリックの動詞である。

テリックの例としては「溺死する」があげられる。誰か溺死しかけた人が助けられるか何らかによって、「溺死する」という事象に中断が入ったとき、彼が「溺死した」とは言えない。つまり目標点に達する前に中断が入ったため、事象が成立しないからである。一方、アテリックである「泳ぐ」の場合、誰かが泳いでいる最中にその泳ぎが中断されたとしても、彼が「泳いだ」ということが成立する。これは「泳ぐ」という事象に目標点がないからである。

Garey1957も指摘している通り、動詞がとる補語によってアスペク的な意味が変わることがある。「弾く」という動詞はアテリックであるが、「モーツァルトを弾く」においては、まだアテリックな性質が残っている。しかし、「モーツァルトのコンチェルトを弾く」では、句全体のアスペク的な意味はテリックになる。以下で「テリックの動詞・アテリックの動詞」という表現を用いるが、その場合は動詞だけでなく句全体のアスペク的な意味をも指す、ということにする。

### 5. 3. テ形接続の意味

テリックの動詞がテ形接続文の前件に用いられる場合を考えてみよう。〔注5〕

- (10) a. …、その手から白い光ったものが離れて落ちた。(吉行淳之介「路地について」)
- b. …それらが親木の枝々に根づいて共生していたのである。(岩田慶治「間と余白」)
- c. 実は私は、……、一ダースも買い込んだのだったが、次々に紛失して、もう一本しか残っていない。(古山高麗雄「文房具の贅沢」)

(10)では、前件の事象の目標点を越えた時点において、テ形接続の後件に当たる事象が実現する。たとえば、(10 a)では「落ちる」という事象がとらえられるのは、「離れる」という動作の目標点を越えたところであり、ここでテ形は後件に対する視点を前件の事

象の目標点を越えた時点に設定するという役割を果たしている。(10 a)は大鹿1986のいう修飾句的な用法、(10 b)は前件、後件の主語が同じ例、(10 c)は主語が異なる例と、それぞれ異なる構文的特徴を持っているが、大事な点はテ形自体の持つ意味的な関係付けがどの例にも見いだせる、ということである。このことは(10)のテ形を「ながら」に置き換えて前件の事象の目標点以前の時点と後件を結び付けようとすると、(10')のように不自然な文になるか、または元の文とは違った意味になってしまう。

- (10') a. …、その手から白い光ったものが離れながら落ちた。  
b. また大きな石を大ぜいで車に積みながら、お坊さんを喜ばせる…  
c. 実は私は、……、次々に紛失しながら、もう一本しか残っていない。

次にアテリックの動詞が前件に現れる場合を見てみよう。

- (11) a. ぼくは、自分の家の電話を、怒りにもえて、睨みつけるようになった。  
(なだいなだ「電話へのいかりをこめて」)  
b. …テレビの外箱を利用して小鳥を飼っている写真があった。(永井龍男「切るたのしみ」)  
c. …ものすごいこまかい方法を使って、こまかいことをやる…(今西錦司「ハダで感じる」)

テリックの動詞の目標点となる時点は、同時にその事象の終了点でもある。アテリックの動詞の場合、目標点はないが、終了点は存在する。しかし、アテリックの動詞がテ形接続の前件に現れるとき、前件の事象の終了点を越えた時点が後件に対する視点の置き場になると言い切れるだろうか。確かに、「ラジオを聞いて勉強する」のように何通りかの読みが可能な例もあるので、可能性として残しておくべきではある。が、アテリックの場合を過不足なく説明するためには、後件に対する視点は前件の事象の終了点ではなく、開始点を越えた時点に位置付けられる、となるであろう。

前件に現れる動詞が、テリックであるかアテリックであるか、と場合分けをして考えてきたが、それらはある時点を超えたインターバルに、後件に対する視点を与えるという点で共通している。つまり、テ形自体が持つ基本的な意味作用は、「境界点を越えた

時間帯に後件への視点を位置付ける」こととまとめられる。そしてこの境界点とは、テリックな動詞の場合は事象の目標点、アテリックの場合は事象の開始点ということになる〔注6〕。

第2節において、テ形接続の前件・後件の時間的關係と意味的關係を同一の次元では扱わずに、分けて考えるべきであることを指摘したが、時間的關係についてはテ形が表しているのだ、という結論に至った。これは森田1980の、前件と後件の前後關係と時間的前後關係とは必ずしも一致しない、という主張と対立している。この森田1980の主張への反論として、言語が表示しているのは、現実の世界ではなく、発話者によって知覚され、模型化(cf.山田小枝1984:45)された認識的世界であり、テ形が表すのはその模型化された世界の時間的關係である、ということを指摘しておきたい。

## 6. まとめ

テ形接続の用法と意味を対象に考察を進めてきた。テ形接続文が表す意味に関わる様々な要因をとらえ、それらのうち、テ形自体によってもたらされる意味作用とは何か、ということが中心的な論点であった。そしてそれは、「境界点を越えたインターバルへの視点の位置付け」とまとめられた。

小論では接続助詞としてのテ形が動詞と結び付く場合に限られていたわけだが、ここで得られた結論は、「～ている・～である」などの表現や、「ほくにも見せて・ちよつと待つて」など終助詞としてのテについても、発展させていけるだろう。

付記 小論は文部省科学研究費 奨励研究(A)(課題番号 01790115)の援助を受けて行った研究の一部である。

小論をまとめるに当たって有益な御助言ををくださった、筑波大学文芸・言語学系の草薙裕教授に御礼申し上げます。

【 注 】

- 1) 『国語学大辞典』では、「接続助詞」を「一文中的句と句とを接続してその意味関係を示す助詞。前句の後句に対する意味関係を示す助詞とも言える。」と定義している。
- 2) 国研1951の分類における、「⑥次の動作・作用の行われる事態・状況・関係事物などを提示する。」に相当。
- 3) 国研1951の分類における、「⑦補助用言に連なる用法。(動作・作用の様態の描写)」に相当。
- 4) ここでの「コト」とは、「モノ」との対立における「コト」であって(cf.木村敏1982)、三上章1972におけるような「サマ・ムウド」と対立させた「コト」ではない。
- 5) 以下の例文は、小田切秀雄他(編)1979『文章宝鑑』(柏書房)から抽出した文である。例文の検索に際して、草薙裕教授のコーパスを利用させていただいた。
- 6) テリックの場合に目標点を越えるということと、アテリックの場合に開始点を越えるということは、それらの事象の成立条件でもある。

【 参 考 文 献 】

- 遠藤裕子 1982.「接続助詞『て』の用法と意味」『音声・言語の研究』no.2,pp.51-63.  
東京外国語大学音声学研究室
- 大鹿薫久 1986.「『て』接続考」『叙説』12,pp.219-228.
- 木村敏 1982.『時間と自己』中央公論社
- 草薙裕 1985.「文法形式が担う意味」草薙裕他『朝倉日本語新講座4 文法と意味Ⅱ』  
pp.1-38.朝倉書店
- 久野暁 1973.『日本文法研究』大修館書店
- 国語学会(編) 1980.『国語学大辞典』東京堂出版
- 国立国語研究所 1951.『現代語の助詞・助動詞 一用法と実例一』秀英出版
- 成田徹男 1983.「動詞の『て』形の副詞的用法 一『様態動詞』を中心に一」渡辺実  
(編)『副用語の研究』pp.137-158.明治書院

三上章 1972.『続・現代語法序説(復刊版)』くろしお出版

南不二男 1974.『現代日本語の構造』大修館書店

森田良行 1980.『基礎日本語2』角川書店

山田小枝 1984.『アスペクト論』三修社

山田孝雄 1936.『日本文法学概論』宝文館出版

Dhorne, France. 1981. *Considérations sur les problèmes d'aspect et de modalité en japonais*. Thèse doctorat de troisième cycle, université Paris VII.

Garey, Howard B. 1957. *Verbal aspect in French*. *Language* 33, pp.91-110.

A Semantic Analysis of the Japanese  
Suspensive-Connective Form:

Meaning and Use of the TE-form

Fumio WATANABE

The TE-form in modern Japanese has been treated primarily as a meaningless connective form, which allows its various context-dependent uses (e.g., contrast, reason, instrument, etc.) to be attributed to its semantic nature. In this paper, I discuss the fundamental semantic function of the TE-form in the following structure [  $V_1$  TE  $V_2$  ]. ( $V_1$  represents the verb which precedes the TE-form, and  $V_2$ , the verb of the main clause).

The following two points are central to my analysis:

- (1) the necessity of distinguishing the semantic function of the TE-form itself from the semantic relationship between the  $V_1$  and  $V_2$  clauses.
- (2) temporality is assumed to be a basic constituent of the relationship holding between the events of  $V_1$  and  $V_2$ , regardless of the dependency of the  $V_1$  clause.

The investigation of the data indicates that the fundamental function of the TE-form is to locate the point of view for the event denoted by  $V_2$  within the interval which follows the boundary point of the event in  $V_1$ . This boundary point varies according to the type of verb:

- (1) if  $V_1$  is telic, the boundary point is the final point, i.e., the goal.
- (2) if  $V_1$  is atelic, the boundary point is the initial point.

This conclusion can also be used to explain various aspect forms containing the TE-form, such as TE-IRU, TE-ARU, etc.